

タリタ・クム

“Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第16号

2011年6月25日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町 65

日本聖公会管区事務所気付

正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL03-5228-3171

発行責任者: 大岡左代子

癒しとなぐさめを与えられる聖霊なるかみさま
あなたを信じ、あなたの力にわたしたちをゆだねます。

あたたかい翼をわたしたちの上にひろげ
激しい風と炎でわたしたちを清めてください。

あなたと共に働き
この世界と教会を新たにすることができますように
今わたしたちをカづけてください。

アーメン

(女性が教会を考える会 わたしたちの祈り集『こころをかみに』より)

東日本大震災で被災されたすべての方々に心からお見舞い申し上げます。
また、この震災によって亡くなられた方々の魂の平安をお祈りいたします。今なお悲しみ、苦しみやささまざまな困難の中におられる方々と共に主がいてくださって、命を守り慰めとカづけがあたえられますように。



南三陸町で
2011. 5. 26



突然襲いかかった未曾有の災害のなかで、それまでの日常を奪われた方々のことを思うと、本当に心が痛みます。こんな時に祈ることが力になるのか、とさえ思いたくなるような光景を見ながらも、震災直後、避難所で懸命に働く子どもたち、Good news を壁新聞に書いて、大人たちを励ます子どもたちの姿にとても希望を感じたものでした。一方、このような緊急時には、一番優先されなければならない力をもたされていない人々が声を挙げるのができにくい状況に追い込まれます。また、緊急時には、それまでの性別役割分担が強化される傾向があります。たとえば、避難所運営は男性、炊き出しは女性・・・というように。

□阪神大震災の時には、女性のレイプ被害について時間が経ってから明らかになるということがありました。緊急災害時には全体に我慢が強いられる中で、被害をうけてもさらに声を挙げるのができない状況がつくられていくのです。その経験から今回は「震災後の女性・子ども応援プロジェクト」が、性被害にあわないようにいち早く避難所などにパンフレットを配る運動を展開し、また被害にあった

方の電話相談などを始めました。その他にも、女性や子ども、障害をもつ人、外国人などに焦点をあてたさまざまな支援活動が展開されているようです。失われたものを新たに創り変えていく時には大変なエネルギーが必要だろうと思いますが、固定化された思い込みではなく柔軟な視点がきっと新たな力になるのではないかと思います。

今号では、阪神大震災を経験された神戸教区の角瀬克己司祭より原稿をいただきました。その中での働きの一つとしての女性たちの姿を紹介してくださっています。「わたしだったらどんな働きができるだろう？」と自分自身に問いかけるきっかけになるような気がします。





大災害の中で



角瀬 克己 (高松聖ヤコブ教会牧師)

東日本大震災によって被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。一刻も早い復興をお祈りいたします。

16年前に起こった阪神・淡路大震災がきっかけで、今なお大きな壁にぶつかっている人々の存在を思いますと、この度の災害からの復興が、非常に長期間にわたることを予感させます。緊急の支援はもちろん必要ですが、例えば心に受けた傷などは数年後に症状として現れてくることもあります。長く心に止め続けることが求められることでしょう。

さて、阪神・淡路大震災では6434人の方々が亡くなりました。その数が表しているのは震災による圧死、窒息死など、震災発生後15分以内に亡くなったとされる方々です。けれどもその後の避難生活の中で、更に多くの方々が亡くなったことを承知しておられる方は少ないのではないのでしょうか。

避難生活は、プライバシーの無い環境での生活です。ゆったりと体を伸ばせる場所もない、夜中にトイレに立つにも周囲に気を遣う、非常に緊張を強いる毎が続きます。しかも周囲にいる人達とは殆ど馴染みがない、その上、食べ物、飲み物も十分には無い、寒くても暖がとれない～そんな生活で体調を崩さないわけがありません。特に高齢者や病気を抱えている人々には非常にこたえたに違いないのです。今回の東日本大震災でも、老人施設から避難した方がすでに多数亡くなったことが報告されています。

避難所や仮設住宅に関わった時に感じたことは、避難生活を続けている人達は実にもろい、ということでした。「疲弊」という言葉ではうまくその実感は伝えられないように思います。感じたままを表現すると、枯れ枝がポキッと折れるといったような印象でした。1週間前に「ちょっと、風邪を引いたようだ」と言っていた方が亡くなった、年輩とはいえ普段と変わらぬ様子だった方が朝には亡くなっていたという場面に幾度も出くわしました。

大方の避難所が閉鎖され、被災者も仮設住宅、復興住宅に移られた頃から浮かび上がってきたのが「孤独死」でした。誰も気づかない内に亡くなり、幾日も経ってから発見されるというケースが目立つようになったのです。それも50代くらいの、特に目立った病気もないという人が亡くなっているのです。原因はさまざまでしょう。でも普段から周辺の人達と親密な関係が結ばれていれば、早く異変に気づき、助けられたであろうと思われるのです。日常の、周囲の人々との関係が結ばれていないところに大きな問題点があると知らされました。孤独死の殆どは男性でした。避難所、仮設住宅等への関わりの中で、コミュニティづくりのためにさまざまなイベント、プログラムを実施しましたが、呼び掛けに応じて積極的に参加されるのは主として女性たちです。男性、それも一人暮らしの方はほとんど参加されませ

ん。戸別訪問をしても、打ち解けて話が出るのは女性たち。男性は話が続かないのです。10人が10人、そうだというわけではありませんが、会話の弾む男性は各仮設住宅でもせいぜい2～3人。わたしが女性ならばもう少し違った展開が出来たのかも知れません。

しかし男性の活躍が避難生活を支えた面があることは言うまでもありません。避難生活に於いて、寝床を確保したり、生活に必要な物資の調達・運搬、また多くの被災者の集団生活の場をととのえる場面では、腕力、筋力の強い男性たちが活躍しました。また瓦礫を取り除き、その下に閉じこめられた人々を救出するためには力の強い男たちが非常に頼りになりました。けれどもコミュニティの形成に於いては女性の活躍が目立ったと感じています。

普段、女性たちの会話を横で聞いていると、どうしてこんなことで笑えるのか、どうしてとりとめもなく話ができるのか、といささか冷たく眺めていたのですが、こうした事態になると、それが非常に強みだと言うことが分かります。男脳、女脳ということが言われますが、こうしたことは脳の働きの違いなのでしょう。それともジェンダーと言うべきなのでしょう。わたしには判断ができませんが、未曾有の大きな災害に見舞われ、それまでの日常性が崩された時に、それぞれの性の優れた働きがあること、そしてその特性をうまく生かすことが復興の歩みには必要なことだと思います。



司祭按手を受けて



中部教区 司祭 フィデス 金善姫

4月16日に司祭按手を受けました。

司祭按手の前に、試験を受ける最中に3月11日に東日本大震災が起こりました。東日本大震災の大変な状況で、司祭按手を準備する日々は「神に祈れるのか」と問われながら過ごしました。司祭按手の前、自分の召命が問われる中で、神に仕え、人びとに仕え、神のみ言葉を学んで教え、礼拝を通して神と人の和解を宣布し、癒しと赦しのメッセージを宣べ伝え、イエスの生き方に従って歩みたいとお祈りしました。人びととともに泣き、ともに笑うものとして、「小さくされたもの」の友になりたいと願っております。神の愛をこの世に示すことが出来るように羊を愛する羊飼いになれるのかと問われるような思いです。

司祭按手の前日には、リトリートが行われ、中部教区の野村潔司祭によって黙想指導をいただきました。マルコによる福音書14:32-42の『ゲッセマネで祈る』イエスの姿から「腹をくくる」という講話とルカ福音書9:28-36の『イエスの姿が変わる』の聖句から「ヴィジョンを描く」という講話をいただきました。野村司祭の司祭按手を受けてからの経験で、

腹をくくる、受け入れる、決断をする、前を向く、責任を負う生き方が求められる事。そして、アメリカの先住民の世界観から「ネズミの視点：見通しがきかない」ではなく、北：野牛(知恵)、南：ねずみ(信頼と無垢)、西：熊(内面性)、東：鷲(物事を明瞭かつ遠くから見極める)洞察力を持って、ヴィジョンを描き、担う事を黙想しました。



主教と司祭団より「主の教会における司祭の務めと働きのために、主の僕フィデスに聖霊を注いでください。」と
握手されました。

司祭按手式は中部教区の渋澤一郎主教の司式と東京教区の笹森田鶴司祭の説教で行われました。笹森先生の説教は、

12世紀にドイツで生きたヒルデガルト・フォン・ビンゲンという一人を挙げて励ましのメッセージでした。男性中心の時代に女性として生き、女性が司祭職に就くことは考えられなかった中世に生きたヒルデガルトは、女性は弱くもろい存在であるという当時の認識の中で、彼女は自分の弱さともろさを基盤とした強さを自覚し、教会の使命を果たしていない当時の聖職たちへ痛烈な非難をします。その批判は、マラキ書の言葉に重なります。神は人びとへの深い関心を持ってくださっているのに、人びとは神の恵みが足りないと神から離れてしまう。それは指導者たちの怠慢やおごりが原因であると預言者は指摘します。神学生の3年生の時、教会の働き人として生きることへの不安や期待を抱き、一緒に希望を語り合った先輩からいただいた励ましの言葉に勇気を得ました。

司祭按手を受けた日の夜、夫の丁司祭から「一つの夢が叶ったね」と言われ、「どのくらい掛かったの」と聞かれました。高校3年生の時から数えて、18年でした。

私は10年前の2000年2月に、中部教区とソウル教区の宣教協力関係によって中部教区に派遣された夫と一緒に日本に来ました。そして、2001年に大韓聖公会で初めて女性が司祭按手を受けるようになりました。2001年に日本に来て、有志の教役者による歓迎会の時、中部教区で退職された渋川良子司祭の送別会がありました。その時に出会った渋川司祭によって、高校3年生の時から心の片方に抑えておいた思いが沸き起こりました。そして、名古屋で行われた婦人会の総会に女性たちの教役者たちが招かれ、共同式を行う姿にはとても感激しました。以前から機会があれば、神学を学びたいと願っておりました。それから4年後、聖職志願をし、神学院で学ぶ機会を与えられました。日常生活の日本語も未熟なまま、日本語で神学を学ぶということはとても難しかったのですが、神学院で出会った方々の中に、東京教区の「女性が教会を考える会」の方々と女性の司祭たちと信徒の姿に励まされながら、先輩の苦勞の姿から悩みながら、3年間の学びを終え、牧会の現場で働いています。

神学院で学ぶ時も、男性の神学生から「司祭」なのか、「女性の司祭」なのか何度か問われました。私は「司祭」となりたいが、まだ「女性の司祭」が日本聖公会において、1998年に開催された日本聖公会総会で、女性司祭を容認する議案と「女性司祭の実現に伴うガイドライン」が可決され、現在も女性の司祭が反対され、認められていない今を生きる者として「女性の司祭」を意識せざるを得ないと答えたことがあります。

日本では、1998年12月12日、中部教区で渋川良子司祭が初めて按手を受け、2008年の12月1日に女性の司祭按手10周年感謝のプログラムが行われました。その時には、退職・現職の教役者たちが18名参加されました。

現在、女性が教役者(司祭、執事、神学教育を終えた聖職候補生)として働いている教区は、北海道1名、東京7名、中部2名、京都3名、大阪1名、九州1名の6つの教区で、15名が現職として働いています。神学教育を受けている聖職候補生を含むと、20名ほどです。数がすべてを表しているとは言えませんが、とても少ない数です。嘱託で働いている教役者もふくめ280名中15名ほどですので、約5%です。教会の信徒の数は現在受聖餐者18,046名中11,619名が女性であるのに(2010年の統計表参照)、女性の教役者はとても少ない人数です。

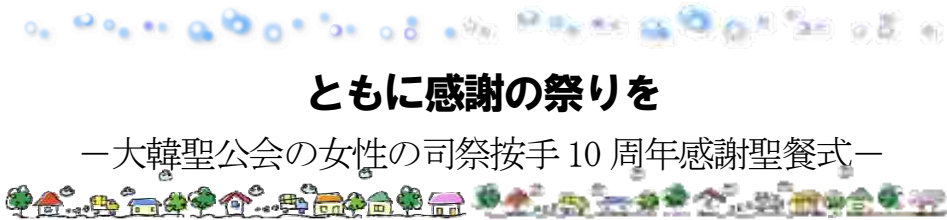
母教会である韓国のソウル教区水原(スウォン)教会に、1人の女性を思い出します。金エダ司祭です。現在は司祭按手を受けて、教会の牧会をしていますが、当時は女性が聖職志願をするだけで多くの反対・非難を受けていました。

幼児洗礼を受け、信仰生活をして教会に居場所があると思っていましたが、女性としてサーバーも聖職も「ふさわしくない」と思われていました。徐々に礼拝の奉仕者にオルター以外にも女性の参与が認められ、料理や掃除以外にも女性の働きは広がりましたが、女性が聖職者として按手を受ける事には長い時間が掛かりました。しかし、多くの人々のお祈りと支えがあり、2001年に女性が初めて司祭按手を受けるようになり、3つの教区で20名の教役者が働いています。韓国も少ない人数です。

最後に、聖公会の女性たちの共働・連帯が強まることを期待しています。婦人会、GFSなどの団体、意思決定機関への参与、管区・教区・教会の様々な働きに積極的に参加する女性が増えることを願っています。そのためには女性たちの日常と密接な関連がある課題に教会も応えられるように宣教の転換も必要であると思います。宣教の担い手となる女性たちが育てられるように女性たちの声を上げ、「沈黙を破って」一人ひとりの思いが大切にされる共同体となりますように。教会に集う私たちのお祈りが礼拝のお祈りとなりますように！

大韓聖公会でも今年4月11日に、女性が司祭按手を受けて10周年を迎えました。

大韓聖公会の新聞に掲載された朴美賢司祭の原稿を翻訳してその様子を紹介します。



ともに感謝の祭りを

—大韓聖公会の女性の司祭按手 10 周年感謝聖餐式—

東京教区 司祭 ドミニカ 朴美賢

訳 金善姬

2011年4月11日は「大韓聖公会の女性の司祭按手 10 周年感謝聖餐式」をささげる日です。女性の聖職者たちが集い感謝聖餐式をささげる理由は、いつも導いてくださる神様と女性の聖職者たちのためにお祈りして下さる多くの方々に感謝するためです。そして、女性の聖職者が自らを省み、お互いに理解を深め、助け合いながら、一緒に成熟していきたいという意味を持っています。すなわち、女性の司祭按手 10 周年感謝聖餐式は感謝の祭りであり、私たちのお祈りです。

実は女性の司祭按手 10 周年と言われても、女性の聖職の歩みはすでに 1980 年代の「若い女性の集い」から始まり、聖公会全体が女性の聖職の必要性を認識したのも 1991 年からだと言えます。

1991 年、金ミリョン委員長を中心にソウル教区の女性の聖職委員会は教会内の女性の活動、女性の聖職の問題、聖職志願者の啓発および女性指導者の発掘・訓練などについて研究・検討・分析し、その結果を教区政策に反映し、宣教 2 世紀の福音化 10 年に女性たちの積極的な参与を引き起こし、宣教力量を極大化しようとしてきました。そのための基本作業として「女性の教会活動に対する意識調査」を行い、その中に女性の聖職按手に対する賛否調査に対して 70.2%の賛成がありました。

そして、1993 年大韓聖公会の管区主教の金成洙主教は記者会見で「女性の聖職按手の問題を肯定的に検討し、早い時期に女性の司祭按手ができるように努めます。すでに世界の聖公会は女性の主教をも受け入れており、また韓国の女性たちの社会参与と教会の中での寄与が目を見張るほど成熟されたからです。これは女性の平等権を認める次元よりも、教会の効率的な宣教のためにすべてが開かれ、参与の幅が広げられ、ともに分かち合わなければならない原則に基づきます。男性のみの聖職者に固執している他教派との一致に妨げになるかも知れませんが、私はこれが究極的には教会の一致と発展に大きく寄与できると信じています」と言及しました。

しかし、現実的には 1994 年 7 月女性として初めて朴美賢伝道師が執事の聖職試験に合格判定を受けたにもかかわらず、按手は受けられませんでした。この状況でも 1990 年から活

動を始めた女性部(聖公会女性団体協議会：オモニ会、GFS、若い女性の集い)は女性政策協議会、女性聖書教室を中心に聖公会の女性の多様な教会活動のために活動を展開しました。このような活動のおかげで女性の聖職に対する聖公会の中での全般的な認識は高まり、1997年10月27日管区総会で当時女性の聖職委員会の委員長であった金ジンマン教授は主題講演を通して女性の人力開発は至急な課題であると力説し、この課題は宣教決議文にも採択されました。「女性の指導力の改革と聖職への参与のために大韓聖公会の積極的な検討と決断が必要です(1997年の大韓聖公会管区総会 宣教決議文 p10)」

1998年の全国総会では「女性の司祭職は至急に要請される課題である。これを制度化させるための具体的で明確な法案を備える」と決議し、1999年の聖所主日(訳注：聖職志願者のために祈りする主日)に実施された女性の聖職の実現のために1000名署名運動に約1300余名が参与されました。このような流れの中で、1999年全国総会で女性の聖職按手が決議され、2001年に民ビョンオク司祭をはじめ現在20名の女性の聖職者が按手されました。

このように女性の聖職按手は女性聖職者の努力だけ、女性の願いだけで成し遂げた新しい歴史ではありません。女性の聖職按手は大韓聖公会の大多数の信徒のお祈りと参与によって成し遂げられた新しい宣教の道です。ですから、女性の聖職按手10周年記念聖餐式は感謝の祭りであり、新しい宣教を開く私たちのお祈りです。



大韓聖公会ですべて初めて按手された閔炳玉(ミンビョンオク)司祭の司式とシスターとして司祭按手を受けたカタリナ司祭の補式で行われた聖餐式
閔司祭は4月に定年退職しました。



女性の司祭按手10周年記念感謝聖餐式を終えて参加した女性教役者と一緒に。
日本聖公会からの神崎司祭も一緒に。

性別欄をしっかりと見えていないので、わたしのカルテや診察券の性別は「女」と記載されます。年に一度の健康診断でもおもしろいことが起こります。検診は、わたしが男の時から続けて同じクリニックで受けていますので、健康診断の書類の性別は「男」になっています。でも、体の多くが女性の状態ですので、検査内容もマンモグラフィー検診などの女性の検査項目を入れてもらわないといけません。検査を受けて行く途中で、書類に印刷されている性別記載「男」が、いつのまにか手書きで「女」に書き直されるのです。性別欄がどうしても必要な医療現場でさえ、このようにその取り扱いはとも曖昧です。

海外では性別を聞くこと自体が差別になることもあり、問いかける場面がとても限定的です。必要がなければ、問われることはない国がたくさんあります。日本でも最近行政の書類などで、 unnecessary 性別記載はどんどんなくなってきています。

次の主日に、出席者名簿に名前を書きながら、性別欄で躊躇している「わたしたち」が教会の中に多くいることを念頭に置いてもらえたら幸いです。それはきっと、わたしたちの聖公会が、誰をも排除しない教会に向かう一つの歩みになって行くのではないかと、そう思うのです。

国連女性の地位委員会に行ってきました。

毎年、3月8日の国際女性デーに近い約2週間、ニューヨークの国連本部で国連女性の地位委員会 (UNCSW) が開かれ、アングリカン・コミュニオンも NGO の一つとして代表団を派遣しています。第55回目となる今回、日本聖公会から派遣されたのは、三木メイ司祭 (京都教区) と大町はいりさん (北海道教区) のお二人です。今号では、お二人からの報告をダイジェスト版でお届けします。(詳しくは、『三木メイ & 大町はいりのニューヨーク便り 2011』をぜひご覧ください。)



(大町はいりさん、三木メイ司祭と現地で二人をサポートして下さったシスター・フェイス・アンソニー)

□ 2人が派遣された会議の概要

名称：第55回 国連女性の地位委員会 (UNCSW55th) 聖公会代表団イベント

会期：2011年2月22日～3月4日

今年は、「完全雇用とディーセント・ワークへの女性の平等なアクセスの促進のためを含む教育、訓練及び科学・技術への女性と女児のアクセス及び参画」をメインテーマとして、各国代表や国連の関係機関、NGO代表等によるステートメントの実施、ハイレベル円卓会合や対話型専門家パネルの開催、合意結論や決議についての協議等が行われました。また、本年1月に正式発足した「ジェンダー平等と女性のエンパワーメントのための国連機関 (UN Women)」の発足記念式典

も行われました。これらと並行して、NGO などが主催するサイドイベントが国連周辺の会場で多彩に開かれました。今年、全体会で主な成果として決議されたのは、次の3点です。

ア) 女性及び女兒とHIV及びAIDS (日本：共同提案国)

イ) 気候変動におけるジェンダー平等と女性のエンパワーメント (日本：共同提案国)

ウ) パレスチナ女性の状況及びその支援

来年のテーマは、「農山漁村の女性のエンパワーメントと、貧困や飢えの撲滅及び開発、現在の課題における女性の役割」です。

UNCSW55 に参加して

大町はいり (北海道教区)

18日間もの長い全行程で、初の時差ぼけに苦しみながらの生活は大変なものでした。一向に時差ぼけは治らず一週間ほど昼間に眠気に襲われる日々が続きました。決して、英語が話せるわけではない私はシスターアンソニーが来てくれなかったらどうなっていたことでしょうか。今年は各国のレポート発表は無く、サイドイベントを中心に活動することになりました。今回のテーマが少女に関するも



のだったこともあり、女の子たちの発表が連日続きました。発表の内容は教育、科学、性虐待、レイプ、誘拐などいろいろあり日本ではなかなか話すことの出来ないタブー視されているものも多く、若者の一人として行った私もこれから日本で何か活動をしていかなければいけないと考えさせられました。参加したことは、日本に帰ってからジェンダーの授業を取るなど確実に私の人生に影響を与えています。

CSW の合間や休みの日はその日その日で違う教会に行きました。それぞれの教会で違う雰囲気を楽しみました。特に、NY で活動をされている MJM (*メトロポリタン・ジャパニーズ・ミニストリー) という団体の方と礼拝をともにしたときは日本から遠い地である NY で私たちと同じように日本語で礼拝としている方々がいることをしり、NY と日本を近くに感じる事が出来ました。MJM の方々には聖書研究会にも呼んでいただき、暖かい時間をともに過ごしました。

やはり、日本人は若くみえるのか、それとも私が童顔なだけなのか、どこへ行っても私は年齢を言うたびに驚かれました。そんなに若くみえますかね？

出会った人は皆とても優しい人たちでした。英語があまりできず勝手もよく分からない私たちを皆気にして手を差し伸べてくれました。アングリカンでの最後の分かち合いの時には私たちは歌を歌ったのですが皆とても喜んでくれて、ともに口ずさんでくれる人もたくさんいました。どこへ行っても人の優しさに触れることができ、大丈夫だろうか、という心配は取り越し苦労だったようです。

参加することができて本当に良かった。ありがとうございました！！

「少女に対する暴力や、教育・仕事などについて訴える少女の声」

(以下の文章は、三木メイ司祭による参加報告「ニューヨークでの国連女性の委員会(UNCSW55)に参加して」より一部抜粋させていただきました。全文は、『三木メイ & 大町はいりのニューヨーク便り 2011』に掲載されていますのでぜひご覧ください。)

今回私が驚いたことの一つは、少女たち自身が自分や他の少女が直面しているさまざまな問題について、大人たちの前でしっかりと語り、そしてパフォーマンスする集会が多数行われていたことでした。NGOの大人たちが、社会的に弱い立場にある少女たちを励ましエンパワーメントしてきた成果を目の当たりにした、という感じでした。例えば、救世軍の集会では、舞台上に3人の少女を登場させて、大人のメンバーが少女に対する暴力の問題についてインタビューしていました。彼女たちは自分が見聞きした少女の誘拐事件や性的虐待事件について、どう聞いてどう感じているかということ語った後で、被害を受けた少女たちが受けた苦しみや悲しみを想像して、自分が創作したダンスや歌で表現して、彼女たちを助けてほしい、少女への暴力のない世界を、と参加者たちに訴えていました。



救世軍の少女たち

また、アメリカ聖公会の女性グループが準備したガールズ・ボイス(少女たちの声)の集会では、特にザンビア共和国の少女のプレゼンテーションがとても印象的でした。パワーポイントを使って厳しい貧困の現実や、国や国際機関へのさまざまな訴えを

具体的に解りやすく発表していました。そのなかで、動画で現地のある少女の生活が紹介されました。彼女は十代で結婚し子供を産みましたが、夫からの暴力を受けて子連れで別れました。親戚の家に身を寄せているのですが、教育も充分に受けていないので仕事がなく、近所の井戸から水を汲んでペットボトルに入れ、隣の家の冷蔵庫にしばらく入れて冷やしてから市場に運んで売ることによって、わずかな生活費を稼いでいます。小さい子供を抱えたこの少女の生きる希望は、どこに見いだせるのか。それは、お金がなくても教育を受ける機会が保障されることであり、科学技術の訓練などを通してきちんとした収入を得られる仕事に就けることです。そのためには、国の教育政策、経済政策の問題はもちろんですが、国際的な援助活動が必要なのです。その訴えが国連の会議室で、ザンビアの少女のはきはきした声で力強く語られていたのには感心してしまいました。「タリタ・クム(少女よ、起きなさい)」と語られたイエスの言葉どおり、少女たちが生き生きと希望をもって生活できるようになるために、私たち大人たちが取り組むべき課題が数多くあると知らされました。

『セクシュアルマイノリティと教会 ～はるかな希望を共に見つめて～』 講演会報告

木川田道子（京都教区）

2月8日、京都教区センターに於いてウィリアムス神学館と京都教区教役者会共催で表題の講演会が行われた。講師は日本バプテスト連盟牧師の臼井一美さん。

まず、臼井さんは講演の初めに「人口の3～10%ぐらいがセクシュアルマイノリティだと言われているが、教会でセクシュアルマイノリティのことを聞いたことがあるだろうか？ないとしたらそれはなぜだろうか？」と問いかけられた。人のセクシュアリティのありようは、現在では、生物学的性という身体に見える現象以外にも、性自認（自分の心の性）や性的指向（自分の性的意識の向く方向）といった自分自身の認識や選択とも深く関わっていて、一人ひとり違う、実に多様なものだとして理解されている。だからセクシュアリティに関わる言葉は、昔よりずっと多岐にわたってきていて、今回の講演資料にも「用語集」が付いていた。

だが教会ではどうだろうか？セクシュアリティに関する認識は一向に広がっていかないどころかかえって偏見を助長する場所になってはいないだろうか、という懸念がある。臼井さんによれば、セクシュアルマイノリティの人で教会を訪れたことがあるという人は少なくないと言う。だが、結局は、教会から遠ざかってしまう。その背景には、教会という場所が、組織のありかた（性別によって名簿やグループ活動を分けるなど）や、説教、聖書の読み方、結婚式文などさまざまな場面を通して、男女二分主義を奨め、異性愛だけを祝福する有言無言のメッセージを送っている場所でもあるということが挙げられよう。だがその根源的な問題として臼井さんは、キリスト教が、セクシュアルマイノリティの存在そのものを、「罪」の問題と関連づけて捉えてきたことを挙げられたと思う。たとえば、ある人が自分のセクシュアリティが他人とは違うのではないだろうか、と悩みを牧師に打ち明けても、「祈りましょう。神様があなたを変えてくださいませ」「私も罪びとなのであなたのことを受け入れます」と言われてしまう現実。キリスト者になりたい、と願っても、教会がありのままの自分を認めず、かえって“罪びと”扱いし、違う自分になるように促されたら？・・・悩みを「共有してあげている」つもりで実は相手を貶めていることに気がつかないクリスチャンの言葉や態度が、相手の尊厳を大きく傷つけている。セクシュアリティというその人の生の根幹に関わる事柄に対して私たちの感受性はあまりにも低いのではないだろうか。（ちなみに、セクシュアルマイノリティを“罪びと”だとする人たちの根拠は「聖書にそう書いてある」ということらしい。・・・しかし曲がりになりにも、聖書を論拠とするのなら言語や時代的背景を学んでからにした方がいいだろう。その上で「聖書にそう書いてある」という場所を明示してほしい。どこに書いてあるのか不明なのだが…）

社会のさまざまな状況や偏見の中で本来その人が持っている力が小さくされてきたことに気

づき、そのような世界の一員でもある自分自身を問い直し、あるべき姿から自由になって人との新しい関係を生きようとしてきたのがキリスト者ではなかっただろうか。

臼井さんは、私たちが一人ひとり皆違う存在として、神様の豊かな創造の業の中で祝福されて生まれてきたこと、当事者にとって、今は希望はずっと遠く感じるかも知れないけれど、ないわけではない。一緒にこの課題を考えようとする仲間はある。あきらめずに、つながりながら、はるかな希望を共に見つめていこう、と講演を結ばれた。

講演時間の後半は、会場との質疑応答で進められたが、私が一番印象に残ったのは、実は臼井さんのプロ意識（という言葉が適当かどうかかわからないが）だ。講演の中でも、「(相手の) 口をふさいでしまうのではなく、応答できるように」「そこから対話を始めていけるようにしたい」と語っておられたが、その言葉通り、同業者？である教役者らのどんな質問にも誠実に、率直に、そして正面から答えられていた。ある質問に答える中で臼井さんは「他の誰かではなく、あなた自身はどこに立とうとしているのか。」と問いかけられる場面があった。それは私自身やそこにいる全ての人にも問われたことだと思う。対話を大切にしながら、他者とつながろうとすることを恐れず、希望を仰ぎ見て、ひたすらイエスを信頼して歩む人と出会え、私も力をもらった気がする。



ブックレットのご紹介 『らしさ』を越えて ジェンダー・性暴力と教会』

2009年3月 日本バプテスト連盟性差別問題特別委員会発行 内容：「ジェンダーを考える」「性暴力を考える」(若干部数、木川田が持っていますので、読んでみたい方ご連絡ください)

GFS からのお知らせ

- ・ 第20回 GFS 世界会議
6月24日(金)～7月4日(月)
場所：アイルランドのダブリン
- ・ 第56回 GFS 全国研修会
テーマ「平和イン長崎」
8月9日(火)～11日(木)
場所：長崎聖三一教会
8月9日10時30分
原爆記念礼拝から開始。
申し込み先：
〒802-0004
北九州市小倉北区鍛冶町2-3-9
小倉インマヌエル教会内
小倉 GFS 宛 (担当 平上さん)
TEL FAX 093-551-0006
締切：6月30日(木)
(申し込み用紙は各教区 GFS)

第19回聖公会女性フォーラム

『乳房の神に聞く平和のメッセージ』

9月18日(日)～19日(月)

場所：長野聖救主教会 予定

宿泊は、近くのホテルを各自で予約お願いします。7月に詳細の案内をします。(リストが必要な方にはお知らせします。)

参加費は1000円+食費

これまでの参加者には後日案内を送付いたします。

申し込み締切：8月末

申し込み：後藤香織司祭

(FAX・電話086-265-5769)

遠方の交通費補助のためのテーブルバザーを行います。

フリーマーケットも出店希望の方は物品をお持ちください

女性デスクからのお知らせ

「第2回 ハラスメント防止担当者の集い」を行いました

3月6日～7日（今思えばあの地震の直前でした）、京都教区センターにおいて標記の会を行いました。参加者は、今回の集まりを呼びかけた管区女性デスク、人権担当者、正義と平和委員会ジェンダープロジェクトと、各教区のハラスメント防止に関する担当者らの21名。日程の中では、各教区の取り組みの現状、京都事件に関する報告、管区（今回の集まりを呼びかけた三者、「懲戒および審判廷規則検討特別委員会」）からの報告、またこれらの報告から浮かび上がった課題について全体での意見交換や協議などを行いました。

現在、11教区のうち、準備段階も含めてハラスメント防止に関する担当部署（委員会やデスクなど）を設けているのが10教区（うち防止の対象の範囲をセクシュアル・ハラスメントとしている教区が2教区、ハラスメント全般としているのが7教区、残り1教区は検討中）です。またこれらのうち現時点で実際に窓口を設け、相談を行っているのは5教区です。

1回目の分かち合いの会を開催してから、すでに2年以上が過ぎ、各教区では経験を重ねる中で具体的な課題が上がってきています。たとえば実際のケースに対応する人材の不足、信徒数がそれほど多くない教区での仕組みづくりの難しさ（被害を申し立てた人、加害者とされた人が特定されないか、窓口での守秘義務が守られるだろうかという不安。一教区で相談窓口担当者を養成する難しさや人材の確保など）被害者への二次被害、防止委員会の独立性をどう保つか、調査過程における第三者の介入の必要性など）です。また実際に訴訟になったときに補償をどうするのか、またハラスメントの共通した定義など管区としてもガイドラインが必要、との声もありました。これらを受けて全体の話し合いでは、今後、各教区の経験や情報の共有を促したり、研修の企画をしたり、専門家への相談へとつなぐといったようなことに取り組む専門部署が管区に必要ではないか、ということになり、担当者会直後に開いた呼びかけ三者でこの件について話し合いました。結果的には、今年1年は全教区の動きが出そろいのを待ってから、来年の総会に向けて管区として専門部署を設置する方向で考えていこう、となりました。ようやく管区でまとまってハラスメントに取り組んでいこう、という動きになってきました。どの教区の担当者の方も、「ハラスメント」という20年前には見えていなかった困難な課題に対して、誠実に取り組み、この課題を進めていこうとされていることを感じた2日間でした。（女性デスク 木川田道子）

お待たせしました!

日本聖公会 女性の司祭按手10年感謝記念誌『新しい天 新しい地』が、ようやく出来上がりました。内容は、「2008年12月の感謝プログラムの概要」「女性の司祭按手への歩み」「資料編」からなります。この冊子は、感謝プログラムにご協賛して下さった方々にお送りする予定ですが、若干残部が出る予定です。冊子を希望される方は、punku@mb.aikis.or.jp 女性デスク、木川田までご連絡ください。（先着順）仕事のかたわらばちばち発送作業を行っています。夏までには皆様のお手元に届けられると思います。（み）



ジェンダープロジェクトより

未曾有の大震災から3か月が経ちました。まだ、先の見えない避難所生活をされている方々が
大勢いらっしゃいます。先日、聞いた話ですが、ある避難所ではしばらくの間、授乳室や女性の
更衣室がなかったそうです。避難所を運営するリーダーは男性がほとんどで、いろいろすること
が多い中で、そこまで気が回らないのかもしれませんが、女性から声をあげにくい雰囲気もあつ
たのかもしれませんが。人のいない場所を探し、壁に向かって赤ちゃんに授乳したり、毛布などで
隠しながら着替えをしなければいけない女性のストレスを思います。よく、女性の視点で、と言
われることがあります。性別に関係なく、お互いのことが気づかえる、そんな関係はまだまだ
理想なのかと、話を聞いて思いました。(松原恵美子)

* こんな資料もあります！・・・内閣府男女共同参画局のホームページ
<http://www.gender.go.jp/saigai.html>の中に、「男女共同参画の視点を踏まえた被災者支援のため
に」というページがあります。女性や子育てのニーズを踏まえた災害対応や、相談窓口、女性の視
点を持った災害復興プロジェクトの提案など何か参考になることがあるかも・・・。

編集後記 一人がいくつかの役割をこなす中で、タリタ・クムも編集作業を終えました。原稿
を書いてくださった方々と編集作業に参加してくださった方々に感謝します。一人ではできないこ
と、一つの教会でできないこと、一つの教区でできないことがこのようにプロジェクトという方
法で女性たちの声を集めることができるのだと感謝しながらの作業でした。感謝！(金善姫)

女性とは？

ジェンダープロジェクトでは、「女性」とはあらゆる社会構造の中で、立場が弱くされている人たちの一つのグループであるという考え方をしています。性の多様化の中、「女性」という表現自体が問題視されることもあります。タリタ・クムで用いる「女性」という表現は、「女性」の視点を大切にしながらも、男女二分法にとどまった性別用語としてのみ理解されるより、包括的な意味で理解される事を意図しています。

正義と平和委員会 ジェンダープロジェクトとは？

教会におけるジェンダー課題の共有と克服のために、すべての人が尊重されるネットワーク作りをめざして活動しています。機関紙としてのニュースレター「タリタ・クム」の発行(年3～4回)、学習会の開催、出前ワークショップの実施なども行っています。一人でも多くの方が、ジェンダーの課題に関心を持ってくださり、共に考えていける場をつくっていきたく願っています。

タリタ・クムとは？

「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとって、イエスさまが言われた言葉です(マルコ5:41)。今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかった女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神さまの祝福によって主の栄光をあらわすために、より生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。